

「ブ賞」^(注1)をいただきました。賢治の研究している方が対象だけど、活動している人も対象で。びっくりしたのがその受賞理由。もし賢治が漁師だったら、あなたと同じ活動をしただろうって。賢治は北上川を見ていてかすかに海は想像したかもしれない。だが、海から森を見る発想はなかった。でも私は真逆。だから、もし賢治が海から陸を見たらきっと同じ発想をしただろうと審査員の方にいっていただけて。

いやあ、うれしかった。でもその表彰状はあの津波で流されてしまったんです。

——えっそれは。残念ですね。

畠山 ええ。いろんな表彰状をいただいでいて。たくさんの方の表彰状、みんな流されてしまった……あれは惜しい。お祖父ちゃんがもらったと孫に見せて自慢したかった。中村哲さんと一緒に年だったの

で。——そうですね。アフガニスタンで活動した中村医師と同時受賞でしたか。再発行はしてもらえないのでしょうかねえ。

畠山 どうでしょう。してもらえたらうれしいですけど。

海の汚染と言葉の力

——牡蠣漁師になられて、高度成長期、とくに東京オリンピック（一九六四年）のころから海の汚染に気づいたそうですが、そのころのことなどを。

畠山 水産高校を卒業して家業の牡蠣養殖の漁師になりました。人手がないから早く息子が大きくなって跡をついでほしいのは親の願望ですからね。

牡蠣養殖は魚の養殖とちがって、エサを海にぶら下げておけばいいんです。魚の養殖は売り上げの六割はエサ代にとられる。ところが牡蠣は0。

最初は何も問題なくてね。ところが海が汚れると赤潮が発生して、牡蠣が養殖できなくなりまして。太平洋の沖の潮が運んでくるのではない、人の側から出たものが赤潮の原因となるのです。

牡蠣の身は白いのに赤くなる。真っ赤になる。気持ちが悪いものですよ。築地の魚市場に出荷したら、築地の人たち、鮮魚商がびっくりして、廃棄処分になりました。

たちまち収入がなくなり、じゃ、どうしようかって。海の行政を司っているの

が水産試験場。そこへ行きました。

ところが試験場の守備範囲は海。海を扱う水産試験場には手に負えない範囲なんです。縦割りの行政だからです。それに気仙沼には日本有数の水産物加工工場がありました。缶詰工場の排水がみんな海に行く、農業で使う農薬も、人間が排泄した下水も海へ行く、でも水産試験場は農薬を海に流さないようにとか、工場排水を規制しろとはいえない部署なんです。

それと牡蠣の養殖は世界的に汽水域^(注2)で行われています。ここの汽水域は岩手県と宮城県の県境です。両域の人間の流したものが注ぎ込みます。人間の生活そのものを見直さなければ解決しません。

この問題をつきつめていくと、人間とは何かにつながっていく。そういう象徴的なものになる……どうやって流域に暮らす人々にこの問題を示して、川から流れてくる水をきれいにするか。そういう問題だとわかってもらうか。

一漁師として抱えた課題としては大きいものでした。行政に相談するとたらいまわしにされました。自分たちにいわれても困るといわれました。